

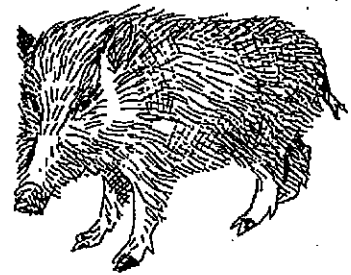


イノシシ

—生態と感染症から見た安全な付き合い方—

仲谷 淳・宇仁 茂彦

(なかに じゅん、中央農業総合研究センター・
うに しげひこ、大阪市立大学医学部)



1. はじめに

イノシシによる人身事故が新聞を賑わすようになった。これには、イノシシの生息域の拡大が関係しているようだ。環境省自然環境保全基礎調査によると、2003年の生息域は1978年に比べて30%増加している。全体的な傾向として、分布域の北上と平野部への進出が見られる。分布の北上には暖冬による少雪化が影響しているらしい。イノシシは本来「里山と平地の動物」だが、これまで人間が里山を活発に利用したため、イノシシは山の中で生活し、里へは危険を避けて近づかなかつた。しかしながら、過疎化や住民の高齢化などで里山での人間の活動が低下したことから、しだいに平地に戻りはじめている。このため、人間とイノシシが遭遇する機会が増加しているのだろう。また、この間、狩猟と駆除を含めた捕獲数は10万頭弱から25万頭(2005年度)へと大きく増加し、イノシシ肉の利用も各地で活発化している。本稿では、イノシシと遭遇したときの対処法および安全な獣肉利用について、イノシシの生態や習性、また、人獣共通感染症などを紹介しながら解説する。

2. イノシシとはどんな生き物か?

イノシシは足が短いため雪が苦手で、日本海側の豪雪地帯には生息しないが、北海道と市街地を除いては、ほぼ日本全域に分布する。西日本を中心にニホンイノシシ(*Sus scrofa leucomystax*)が、南西諸島にはリュウキュウイノシシ(*S. s. riukiuanus*)が棲み、両者はユーラシアを中心に広く分布するイノシシの亜種とされる。ふつう、体重はニホンイノシシで100kg、リュウキュウイノシシで50kg止まりで、大陸に棲むイノシシと比べると小型である。イノシシはずんぐりした弾丸型の体型をもち、疾走すると時速40kmを超え、まさに「猪突猛進」する。しかしながら、肉食獣に襲われたり、人間から逃げる場合などを除き、滅多に走らない。猪突猛進という言葉は、イノシシが人間や犬に追われて必死に逃げる様から付け

られた表現で、イノシシを観察する者から見ると誤解と言える。イノシシの性格はむしろ温和であり、家畜化されてブタがつくられている。イノシシは雑食性であるが、実際はほとんど植物食で、他の野生獣を襲って食べることはない。

イノシシは基本的に単独型の社会構造をもつ。2才以上の成獣では、雄は単独で、雌はふつうその年生まれの子どもと一緒に生活する(写真-1)。雄と雌は交尾期の数日間以外は分かれて行動し、雄は子育てに参加しない。ただし、ときには血縁関係にある母親が数頭集まって大きなグループをつくることもある。母親から独立した1才の亜成獣はしばしば同腹でグループを形成する。

イノシシが棲む野山に、里の住民やハイカーがよく入るが、イノシシと出会った人は少ない。それは、イノシシが人間を避けて行動しているためで、夜行性を示すのもその1つである。寝場所もまた、人間を避けて選んでいる。寝ている時は、人間が至近距離まで近づいても、じっとしてやり過ごす。宮崎県でススキをドーム状に積み上げてつくったイノシシの巣を見つけ、その大きさを測ろうとメジャーを当てた瞬間、イノシシがススキの中から飛び出して逃げた。呆然としたが、今はイノシシの我慢強さとトラブルを避ける性質によるものと思っている。

3. イノシシに遭遇した時の対処法

人が野山でイノシシに出会ったとき、イノシシが人を襲うことは稀で、ふつうはイノシシの方から逃げる。しかし、手負いになったり、犬に追われたり、冬の発情期で雄が興奮していたり、あるいは至近距離で突然出会った場合などは、襲ってくることもある。また、イノシシが背中のかたがみを逆立て、歯をカッカッと鳴らして威嚇して近づいてきた場合には、とくに警戒が必要である。体表に縞模様のある子ども(うり坊)に出会った場合、近くに必ず母親がいるので、近づいたり追いかけたりしない。イヌを連れていると、猟犬と見なして襲ってくることもある。イノシシにとって、イヌは、体の大小を問



写真-1 単独雄 (左) と母子グループ (右)

写真-2 人に慣れたイノシシ

わず、どう猛な生き物と映る。このため、イノシシが向かってきた時は、必ずイヌを放して逃がす。

イノシシと出会った時の安全対策として、できるかぎり冷静になって相手の出方をうかがいたい。イノシシが興奮している場合には、背を向けたり、急に走って逃げたりすると、さらに刺激することになる。また、石を投げたり、棒を振り回してはいけぬ。イノシシと向かい合ったままで、ゆっくりと後退し、速やかにその場を立ち去りたい。万一に備えて、登れそうな木や隠れる立ち木があるかどうかなど、周囲を見渡す余裕が大切である。傘があれば、広げて隠れるのもよい。

住宅地などにイノシシが侵入した場合、取り囲んだり、むやみに捕まえようとしてはいけぬ。もしそうすれば、イノシシはさらに興奮し、鬨雲に突進したり、人に噛みつきこうとする。基本は、イノシシを興奮させずに、山に帰るよう誘導することである。兵庫県六甲山麓にある住宅街では、人慣れたイノシシをよく見かける(写真-2)。そこの住民は「玄関をあけたら、目の前にいることがあるが、別に怖いイメージはない」と言う。住民もまたイノシシに慣れている。人間に慣れて近づくとイノシシには、逃げずに逆に追いかけるとイノシシが逃げていくが、これは経験のない人には難しい。この場合、何もしないで立ち去ることが安全である。人間の生活圏とイノシシの活動圏が極端に重なる場合には、あらかじめ、イノシシとの付き合い方を考えておく必要がある。

イノシシに襲われて噛まれた場合、多くは内出血を起こし、皮膚が大きく腫れ上がる。雄は長く伸びた犬歯(牙)

をもつが、後ろに反っているため、相手を襲うのにはあまり効果はない。ただし、脇を通り過ぎる時は、急に首を後ろに振って、牙で引っかけることがあるので注意したい。けがをした場合は、できるだけ早く医師の診察を受ける。

野山で農に掛かったイノシシと遭遇することがある。人間が近づくと死にもものぐるいで突進し、足に掛かったワイヤーで足首を切って襲いかかることもある。丈夫な箱罾であっても、イノシシが捕獲されている罾には近づかない方がよい。罾の設置場所の周辺には、捕獲許可証が目立つように掲示されている。誤って人間が罾に掛かることもあるので、野山に入る場合にはこの掲示に注意したい。

イノシシが人間の生活圏に入り込むと、交通事故の危険性が増加する。イノシシが出没する地域を走行する場合は、運転に気をつけ、スピードの出し過ぎに注意したい。また、運転中にイノシシと出合っても、決してイノシシをひき殺すようなことを考えてはいけぬ。鳥獣保護の精神にもとらうえ、違法行為でもある。車の修理費がかかり、時には運転者や同乗者がけがを負う。

4. 人獣共通感染症とその予防法

イノシシの増加にともない、各地でイノシシ肉の利用が推進されている。また、イノシシの生息域で、私たちは生活や野外活動をしている。そのために、イノシシに関係する人獣共通感染症を理解し、その予防策

皮膚炎を起こす甲虫類

をとる必要がある。表-1は、主な感染症について、その感染経路と予防法を示している。

E型肝炎は、2003年から2005年にかけて、鳥取県・福岡県・長崎県で、イノシシの生肉や生の肝臓を喫食した11人の内、8人が発症し、1人が急性劇症肝炎になって死亡した。熱帯・亜熱帯地域はE型肝炎の流行地で、人々は主に飲み水から肝炎ウイルスに感染する。わが国は非流行地とされているが、少数の人がブタ・イノシシ・シカなどの肉を食べて感染し、発症している。肉や肝臓の生食をやめ、加熱（63℃、30分）することによってウイルスの感染を予防できる。

腸管出血性大腸菌（STEC O157）がウシ・シカ・ブタから分離されているが、イノシシが感染源になるかどうかは現在不明である。動物学的に同種であるブタが保有動物であることを考えると、イノシシがこの細菌を保有する可能性がある。予防には、肉や肝臓の加熱（75℃、1分間）が必要である。

1972年から1985年にウェステルマン肺吸虫症の241例が九州で報告され、その感染源はイノシシと考えられた。それまでは、人が川のモクスガニ（第2中間宿主）を食べて肺吸虫に感染することが知られていたが、さらに肺吸虫の幼虫を持つイノシシ肉を食べることによっても感染することが分かった。肺吸虫は人の肺・腹部・脳などに寄生し、重篤な症状をひきおこす。予防法はイノシシ肉の生食を避け、75℃以上に加熱することである。

線虫類のドロレス顎口虫の成虫はイノシシの胃壁に寄生する（写真-3）。虫卵は糞便と共に排出され、水中で幼虫が孵化してケンミジンコに入り、次に溪流魚（アマゴやアユなど）に取り込まれる。人がこの溪流魚を生食すると、顎口虫の幼虫が人体に入り、皮膚爬行症をひきおこす。わが国で58例（九州から42例）

が報告されている。予防法は溪流魚を刺身で食べず、75℃以上に加熱することである。

フィラリア類（線虫類）の1種であるオンコセルカがイノシシに寄生している。このオンコセルカの媒介者（中間宿主）はブユで、イノシシとともに人も吸血して伝播させる。九州で5例の人体寄生例が見つかり、症状として皮膚の炎症や腫脹が見られた。ブユの吸血を予防するために、長袖シャツや長ズボンを着用し、またブユ忌避剤を使用するのがよい。

イヌやネコに寄生するマンソン裂頭条虫の幼虫はカエル・ヘビ・スッポン（第2中間宿主あるいは待機宿主）に寄生し、またイノシシの体腔や筋肉にも見いだされる。人がイノシシ肉を生で食べると幼虫が体内に入る。その後、幼虫は目・脳・皮膚などに移行し、重い炎症をひきおこす。予防法はイノシシ肉を75℃以上に加熱することである。

イノシシから感染する訳ではないが、イノシシの血液



写真-3 イノシシの胃壁に頭部を侵入させて寄生しているドロレス顎口虫成虫（矢印、実際のサイズ、長さ0.6～2.0cm）

表-1 イノシシに関する主な人獣共通感染症

疾病	感染経路	予防法
E型肝炎	肉や肝臓の生食	肉や肝臓の加熱
腸管出血性大腸菌感染症	肉や肝臓の生食	肉や肝臓の加熱
ウェステルマン肺吸虫症	肉の生食	肉の加熱
ドロレス顎口虫症	溪流魚の生食	溪流魚の加熱
フィラリア症	ブユによる吸血	長袖シャツや長ズボンの着用、 ブユ忌避剤の使用
マンソン孤虫症	肉の生食	肉の加熱
ダニ刺咬症	野山の散策、 イノシシとの接触	長袖シャツや長ズボンの着用、 ダニ忌避剤の使用、 ゴム手袋の着用

皮膚炎を起こす甲虫類



検査で、ツツガムシ病リケッチアや日本紅斑熱リケッチアの抗体が検出されている。イノシシが生息する野山でツツガムシの幼虫に刺されたり、マダニ類に咬着されると、人もまたこれらのリケッチアに感染する危険性がある。ツツガムシ病では、発熱・頭痛・リンパ節の腫脹などが見られ、日本紅斑熱では、発熱や皮膚の紅斑が見られる。症状がある場合には、医師の診察を受ける必要がある。

ダニ類は地表や草木に付着して、野山を散策する人に咬着する。また、狩猟者や解体従事者がイノシシに接触する時に、ダニに咬着されることがある。咬着の予防には、ダニ忌避剤の使用、長袖シャツや長ズボンの着用、また、イノシシに接触する時にはゴム手袋の着用を心がけたい。ダニが皮膚に咬着した場合、無理に引っ張るとダニの口器が切れて皮膚に残り、痒みや炎症が数カ月続く。できれば、医療機関で皮膚を小さく切開して、ダニの先端部も共に切除してもらうのがよい。

5. おわりに

近年、イノシシの分布域が拡大し、人間の生活圏と重なるようになってきた。そのために、人とイノシシが遭遇する機会が増え、軋轢が生じている。イノシシは干支

にも数えられ、なじみ深い動物でありながら、私たちはイノシシの本当の姿をよく知らない。このため、野生のイノシシと聞くだけで、多くの方は過剰な反応をとってしまう。また、感染症の知識がない場合、獣肉を生食して病気になることがある。本稿によって、イノシシの生態と行動がよく理解され、人間とイノシシの間に起こる軋轢が軽減されることを願っている。

参 考 文 献

- 木村 哲・喜田 宏編(2004) 人獣共通感染症, 447pp, 医薬ジャーナル社, 大阪.
- 仲谷 淳(1996) イノシシ. (日本動物大百科哺乳類Ⅱ. 日高敏隆編, 平凡社, 東京), 118-121.
- 栗松克政(1986) 肺吸虫症, 呼吸5:144-151.
- 高橋春成編(2001) イノシシと人間, 406pp, 古今書院, 東京.
- Uni, S., Bain, O., Takaoka, H., Miyashita, M. and Suzuki, Y. (2001) *Onchocerca dewittei japonica* n. subsp., a common parasite from wild boar in Kyushu Island, Japan, Parasite 8: 215-222.